



うまい・きれい かほく米づくりの運動では10の技術の実践を推進しています。どれだけ実践できているか、チェックしてみましょう！

「環境にやさしく」「うまい・きれいなかほく米づくりへ」

土づくりで、土の元気を取り戻そう！

推進技術	目標	チェック
1 播種量 (うす播きの励行)	・1箱当たり120gの播種は実施できましたか。(太植による過剰生育の抑制) (高密度育苗栽培の方は営農の手引き3ページ目参照)	
2 育苗日数 (健苗の育成)	・播種から田植えまで 1か月以内 の育苗日数が守れましたか。(初期生育の確保) (高密度育苗栽培の方は営農の手引き3ページ目参照)	
3 植付本数 (3~4本植えの励行)	・1株当たり3~4本の植付本数を守りましょう。(適正茎数の確保)	
4 適正な栽植密度 (優良茎の確保)	・1坪当たり60株の栽植密度が確保できましたか。(適正茎数の確保)	
5 適正な施肥 (栄養凋落防止と登熟向上)	・基肥一発施肥への切り替えができていますか。 ・生育状況に応じた追加穂肥の実施をしましょう。	
6 田植え時期 (早植えの防止)	・5月田植えを実施できましたか。(過剰生育の防止)	
7 中干し・溝切り (遅発分けつの抑制)	・田植え 1か月後 からの実施 (過剰生育防止) ・中干し期間 1か月 (コシヒカリ) の遵守	
8 除草・防除 (畦畔等除草とカメムシ防除の徹底)	・7月上旬までの追加除草 ・水稻の生育ステージにあわせた適期防除の実施	
9 水管理 (飽水管理の徹底)	・中干し後から出穂までの約 1か月 (コシヒカリ) の飽水管理 ・出穂から刈取り直前までの 1か月以上 の飽水管理	
10 刈取時期 (適期刈取りの励行)	・籾の黄化程度に応じた刈取り	

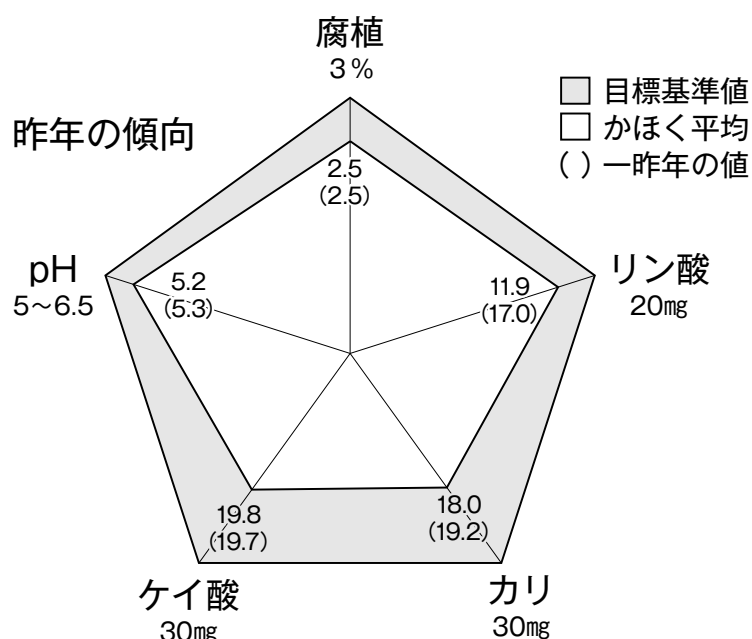
ポイント① 天候に左右されない米づくりは土づくりから

営農の手引き13~15ページも参照ください。

●米500kg分の土づくり 土づくり資材を秋施用していない場合には春耕前に施用しましょう。

田んぼからは、収穫した籾に相当する養分が持ち出されます。

養分は肥料でも補えますが、土づくり資材によりケイ酸、リン酸、鉄分など色々な成分を補うことができます。



- 土壌調査の結果、管内水田のケイ酸、リン酸の成分は不足気味です。
- 安定した生産を続けるには、土づくり資材の投入による、地力増強が必要です。

資材名	施用量
かほく大地の恵 Fe	60kg / 10a
ひやくまん馬力	

右面に続きます

営農に関する問い合わせはJA (☎288-7555)、津幡農林事務所 (☎289-4158) におたずねください。

ポイント② 種子の準備 ー浸種は3月末からー

営農の手引き31~32ページも参照ください。

●播種は4月になってから！

- ・早い種播きは苗の老化や早い田植えに直結してしまい、品質低下の原因にもなります。
- ・育苗日数の目安は1か月以内です。
- ・田植日から計算して播種日を決めましょう。(田植は5月に入ってから)

●播種量 120g/箱でガッチリ苗を育てましょう。

- ・乾籾で1箱当たり120g播き、必要な苗箱数は10a当たり18箱(60株植)

●種子消毒

薬剤名	使用時期	使用濃度	浸漬期間
テクリードCフロアブル	浸種前	200倍	24時間
種籾重量(kg)	10	50	100
水量(ℓ)	20	100	200
薬量(ml)	100	500	1000

※テクリードCフロアブル100ml 1本で10kgの種子が浸漬できます。

薬剤名	使用時期	使用濃度	浸漬期間
タフブロック	催芽時	200倍	24時間
種籾重量(kg)	10	50	100
水量(ℓ)	15	75	150
薬量(g)	75	375	1125

●種子消毒液の残液処理は適正に！

残液はもちろん、容器等の洗浄液についても残液処理が必要です。河川や用水への排出は厳禁！

※種子消毒の残液は下記の施設で処理します。(※無償)

受入施設：JA北部育苗センター(電話 283-5541) 処理希望の方は事前にご連絡ください。

●浸種 積算温度(水温×浸種日数)は100℃、コシヒカリは120℃を目安に

水温	10℃	15℃
浸種期間(コシヒカリ)	10日間(12日間)	7日間(8日間)

※浸種水量は種籾の2倍以上とし、2日に1回水の入替えを行う。

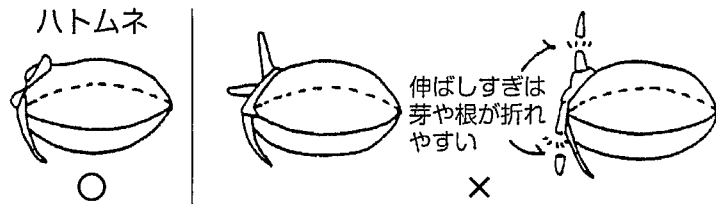
※水温は10℃以上となるように温度調整を行う。

●催芽

催芽適温	催芽程度	日数
30~32℃	1mm(ハトムネ)	1.5~2.0日

※伸ばしすぎは芽や根が折れやすい。

◎催芽の状態(80%以上ハトムネ状態に！)



高密度播種苗栽培に取り組まれる方へ

営農の手引き3ページも参照ください。

高密度播種苗栽培は、省力・低コスト技術として期待されますが、成功させるには播種から田植えまでの管理が重要です。下記に注意してください。

- 催芽時：芽や根が長く伸びすぎると、均一に播種できず、播種量も確保できません。
- 播種量：JAから出荷される出芽苗は250g播きを基準としています。
- 播種タイミング：下記2点を考慮して作業の時期を決定してください。
 - ①田植え時期：5月10日以降をおすすめします(天候が安定する時期)。
 - ②育苗期間：15~20日と短いです(これ以上は老化苗となりやすい)。
- 根量が少なく、植え付け時に浮き苗や流れ苗となりやすいため、下記の点に留意してください。
 - ①専用田植え機を使用する。
 - ②荒起し・代かきはていねいに行い、田面を均平にする。

農作業機械等による事故に注意しましょう

農作業に伴う死亡事故は、機械による作業中の事故が多く、また、4~5月の発生が多いです。

- ・交通量の少ない一般道・農道を選んで通行しましょう。急勾配な道は避け、道路幅や路肩もチェックしましょう。
- ・安全キャブ・フレームのあるトラクターを使用し、シートベルトの着用を徹底しましょう。
- ・作業終了後、ほ場を出る前にブレーキの連結ロックをしましょう。
- ・反射板を作業機や車幅がわかる位置に貼付しましょう。
- ・機器を使用する前に電源コード等の断線、損傷がないか確認しましょう。